

哲學研究

第五號

第一卷
第五冊

メーヌ・ドゥ・ピランの出づる迄

錦田 義富

一

歐洲人文史上第十八世紀程、哲學の價値の認識せられ、哲學者の威力の發揮された時代は尠からう。武勳隠れなき地上の王者が、精神界の一從卒たるを無上の光榮とした時代であつた。一莖の野花に實在の神秘を觀ずるよりも、格言集とも見るべき「人間論」を歌ひし詩人が代表的作家たりし時代であつた。ノートル・ダムの高塔、マデレーヌの伽藍に隨喜の涙濺ぐ人稀れにして、サロンに製造せられたりし無神論てふ新宗教に渴仰する民衆多かりし時代であつた。危篤の病床に見舞へる友に向つて、吾が健康を話題となす勿れ、我等の間には永遠なるものの外に問題あるべからず

と叫びし人さへ出でし時代であつた。當代學者の抱負は哲學によつて有らゆる人文活動を規正指導し、理性の下に凡ての精神活動を從屬屈服せしむるにあつた。彼等は人文價値の批判者たるのみならず、亦實に其創造者たるを期した。而して彼等は大なる程度迄之を實現するとに成功した。立法者は須らく哲人なるべしとのプラトンの夢は、二千年後の「健全なる悟性」の人達によつて現實にされた。實に第十八世紀は文字通りに「哲學的世紀」であつた。

抑も斯の如き尊重は如何の方法によつて贏ち獲られたであらうか。何を惡みとしてしかく威力を恣にし得たであらうか。學者が或は平明暢達或は激越奔放の筆を揮つて、幽去にして錯綜を極むる宇宙人生の大問題を易解ならしめ興味あらしむるやう骨折つた爲めもあるであらう。實に當時程哲學と文學とが密接なる關係に立つたとは稀であつた、哲學者と文學者とのけじめをつけ兼ねる程である。又何時の世如何なる處にても人にとつて常に親しく永しなへに關心の中心となる、人間の研究が哲學の主要問題であつた爲もあらう。意識現象心身相關現象の心理學的乃至心理生理學的研究が最も盛に行れた時代であつた。ヴァスコ・ダ・ガマ、コロンブス等の地理上の大発見、コペルニカス、ケプラー、ニュートン等の天文學上力學上の大發

見によつて、まざ／＼と知の力なるとを見せつけられて以來、自然科學の萬能を夢疑ひなき者と思念し、一切の事務を「自然」として考察すべきものと覺悟するに至つた爲もあらう。否一層眞實の所を云へば、ペーコン、デカルトの二哲學者によつて、この目覺しき「自然征服の秘訣が「自然の理解にある」と、而して其理解の方法が經驗的歸納法と數學的演繹法との外にあらざるとを明晰判然と説示されて以來、實在の神秘、人性の機微、世相の紛糾も同一の見方同一の取扱によつて残る隈なく闡明統御し得るもの、又しかなすべき者と確信するに至つた爲めもあらう。殊には宗教道德政治が單に既成傳承なりとの權威を後楯にして、人心に不當の抑壓謂なき屈服を強要した國（佛國の如き）に於ては、破邪顯正の方便として、自然界に妥當せし方法が直ちに人事界に適用された爲めもあつたであらう。何れにもせよ文藝復興期に目覺めたる自由の精神が情意の執着を迷妄として退け、理性を有ゆる點に於て公然使用し「推理して」(Kant: Was ist Aufklärung? Gesammelte Schriften VIII, S. 36—37) 隨處に永劫自同の「自然」を發見し、此理性的認識に従つて一切の生活關係を規定し、之を以つて凡ての評價の標準となした、と云ふ點に啓蒙の本領があるのであらう。約めて言へば自然主義優越の宣傳と承認——茲に哲學の尊重學者の權威が基礎づけられて居たのである。

二

啓蒙思潮は、夙に革命を成就して社會の制度組織整頓し人文の華咲くに最も好適なりし英國の學者によつて先づ提唱せられ、現實の腐敗醜惡を極めたる政治的社會的狀態に對比して理想とも見ゆる隣國の文化に心酔したりし佛國の文人學者によつて輸入宣傳せられ、三十年戦争の痛手漸く癒えて生民少しく其堵に安ぜんとするに際して又々七年戦争の起るあり民族として國家として未だ外形的にも安定せざりし獨逸に波及して多少の開展を見たるばかり、此思潮の波の最も勢猛に打寄せ打返せるは英佛二國であると云はねばならぬ。

ロックが實在に就て論議するに先ち人間認識の起原發達範圍を精査すべしと説いて、近世經驗論を堅い地盤の上にすえてより以來、外界實體を否定するバークレーの主觀的觀念論を経て、經驗論の論理的歸結を示すと云はるるヒュームの懷疑論に至る迄、時あつてブリストリの唯物論、ロトランドの理神教、マンデヴィルの極端なる利己的快樂說稱導せられたれども、流石に健全なる常識を旨とし敬虔の念深くよく知信の並存にて満足し得たりし英國にては、自然主義の發展は極めて自然の發

達を遂げたれども其必然の歸結を暴露すると比較的尠かつた。懷疑論者として名高きヒュームさへも形而上學に對してこそ懷疑的なれ、正當には「實證論の父」(W. E. Dahlband: *Geschichten d. neuern. Philos.* I. S. 347)と稱するを可とすと説く哲學史家もある位である。然るに一衣帶水を隔つる佛國の啓蒙學者は、奉ずる處の自然主義の理論的實踐的歸結を無遠慮に又大膽に導き出したばかりか、更に之を誇張し危矯ならしめて憚らず、或は一糸亂れざる理路を展開するに明快暢達の文を以つてし、或は激發煽動的の筆を以つて心胸に訴へ進んでは政治道德宗教等の人文機能を彼等の「頭腦の證明」の結果を以つて變改規正せんと努力した。殆んど同時代の人であつたヒューム(1711—1776)とデイデロー(1713—1784)の著作を讀めば思ひ共に過ぐるものがあるであらう。

三

佛國に於てしかく徹底させられ過激になされ破壊的にされたのには此國特有の因縁があつた。夙に近世の初期に於て、典雅優麗の文割切深刻のみに依て不朽の名聲を博せるミセル・ドゥ・モンテローヌ(1533—1592)を先達とし、ジャン・シャロン(1541—1603)

フランソア・サンセ (1563—1634) によつて人心に刻み込まれたる懷疑思想の根ざし深きあり、デカルト (1596—1650)、パスカル (1623—1662) と云ふ如き哲學者思想家にして同時に大數學者たりし人々が吾人の思惟に對する數學的方法の重要旨趣を明說せる爲めか、一般に數學の研究普及に於て他國に優るあり、此二機縁を以つてするも優に自然主義の徹底と之を破壞的歸結に導くに足つて居た。蓋し思想の幽奧、理路の錯綜は動もすれば朦朧晦澁に陷るの弊あり、思考の明晰理論の貫徹して一毫の神秘をも許さざらんとする處に數學の本領がある。近世解折幾何學の祖たるデカルトが之を以つて學問の模範とし、哲學を「普汎數學」たらしめんと企圖せる亦所以なしとせぬ。宗教心に讓歩する爲め、又は常識を逸せざらんが爲に必然の論理を枉ぐるが如きは、數學の訓練を受けたる佛國哲學者の潔しとしなかつた處であらう。(人の知る如く此國の哲學者と云はるる程の人にて數學に長じなかつたものは稀であつた)。

又懷疑の人は疑ふと云ふと其事自身に多大の興味を感ずるものである。疑はんと欲するも疑ふ可らざる根本原理を發見せんとする人は「我在りて」ふ直證にも達しられよう。疑ふと云ふと其事に疑ふ可らざる前提の潛めるを洞見する人は疑ひによつて却つて普汎妥當の認證を證明するとも出來よう。左様なる理論的執着や沈潛

集中を缺げる人にとつては疑ひは正に破壊の最良武器である。極めて無雜作に其價値の相對性の主張され勝ちなる道德宗教政治等實際的方面に於て破壊は特に容易に行はれる。佛國啓蒙期の自然主義の鮮やかなる開展を見せたる亦怪しむるを須ぬ。而も因縁はそれのみに盡きない。

佛國の凡ての思想家の仰いで師事するを耻ぢざる近世純理論の祖たるデカルト其人の思想中に既に自然主義への推移を促す契機が多分に含蓄されて居たのである。惟ふに其認識論は感覺論其形而上學は機械的唯物論其實踐的態度は個人的享樂主義となるのが自然主義の偽らざる本領であらう。今啓蒙の中心興味となれる人性論に就てのデカルトの所論如何なりしかを回顧するに、彼は動物は一種の自動機械にして「擴がり」を本質とする物質と同じく全然機械的に決定されたるものなること、従つて其心意作用は神經系統内の機械的過程に過ぎざることを力説し乍ら、獨り人間は物心二實體の結合よりなるものとして一方に動物的方面を具ふると共に他方に明晰判然たる知的表象と自由の意志を有することを許した。されど等しく心意生活にてあり乍ら、動物の心意は機械的唯物的にして人間の夫れのみ自由非物質的なりとは受取り難き所論と言はねばならぬ。少くとも極めて不明晰不判明な

る考方と謂ふてよいであらう。加之ロツクは人間の表象作用も窮極する處外界實在の刺戟によつて生ずる感性的感覺に過ぎざることを主張少くとも示唆した。斯る上は寧ろ一步を進めて人間の精神生活と動物の心意生活を程度の差に歸し、凡ての心意生活を感覺論的、唯物論的に見るがデカルトの樹立せる認識の根本原理たる直接自明てふ標準に適ふ所以ではないか。否更に徹底的に考ふれば、デカルトの主知主義デカルトの數學的方法によつて自然の認識とは其中に分量的規定を發見することなりと教へられたる我等は同一の主義同一の方法を以つて心意活動をも考察すべきでは無いか。外界自然に對して彼れが如く有效妥當なる見方は内界精神に對しても亦等しく有效妥當であらねばならぬ。ロツクは斯く考へて認識作用に對して經驗的心理發生的研究を行ひ彼れが如く明確に人間精神の秘密を發いた。我等は此研究を層一層徹底的に遂行しデカルトの所説に含まるる不純の要素を除去することに努力せねばならぬ。若し又直接自明を以つて言はゞ、我思ふと云ふ如き高等なる思考作用は極めて復合的なる過程であつて時間上餘程後に發達し來るものである。現前の印象感覺こそ何人も疑はんとして疑ふを得ざる嚴乎たる第一事實では無いか。佛國啓蒙學者の胸中を徂徠した感想は恐らく右の如きものであ

つたらうと思はれる。自然は所興に非らで方法的所産なとりする批評哲學の立場より見れば、デカルトの方法論中に如上の歸結を引出し得る要素は充分存在したと言はねばならぬ。加ふるにガッサンデイのデモクリトスを復活せる原子論や、各國にて當時著しく發達した生理學によつて巧に施された生命現象の機械的説明は自然主義に向つて多大の援助を興へた。

當代佛國の啓蒙學者として身木石よりなれる譯ではない。溫い情熱い血はあつた。否彼等が銳利なるメスを揮つて内は心意の活動より外は既成の歴史的 cultural 財に至る迄分析解剖餘力を剩さなかつたのには高い人道的動機が働いて居た。彼等とて單に冷靜なる論理的整合の要求だけに動かされたのではなかつた。又懷疑の爲めの懷疑、破壊の爲めの破壊を悦んだ人ばかりではなかつた。學は天下の爲めにすとの經世濟民の志に動されて敢て自然主義をして斬魔の利劍を揮はしめた人が多かつた。神の賞罰の名によつてのカトリック僧侶の跋扈、傳承の道德習慣を利用しての王侯貴族の壓制は如何に無告の民衆を泣かしめ、如何に志士仁人の血を湧き立たしたことであらう。之を救ふの道他に無し、自然的「永劫的」を以つて「歴史的」「時間的」を破壊するにあるのみ、自由批評を特性とする理性の名によつて動もすれば苟安妥協

に通れんとする情意の執着より解放するにあるのみ。斯くして當代の哲學者は一面博愛の天使たると共に他面否定のメフィストフェレスたらんことを期した。謂ふ迄も無く建設さるべき新なる社會理想の國家は多數人民の幸福を目的としなければならぬ。ビョルンソンの云ふ如く「少數は常に新にして多數は常に正しい」。而して之が實現の爲めには一般民衆の同心協力に待たねばならぬ。かくして當時の識者は自己の學說所論の普及宣揚に努めた。通俗に歡迎されん爲めには理論は平明にして文章は感激的でなければならぬ。かくして當代の哲學は常識的激發的たりしものが多かつた。「百科辭典」の如き其一例である。而して特定人の哲學はあれども哲學一般なるものなしとさへ稱せらるる程個人的特異的なる一面を備ふべき筈なるにも拘らず、當代佛國の哲學は團體的協同的なるもの多かりしには種々の理由もあつたらうけれども、一致して人道の敵に當らんとする實際的動機も其中の有力なる一理由であつたらうと想はれる。「百科辭典」は十有餘人の手になり「自然體育」には五人の編纂者があつた。斯る共同編纂ふて現象の出現に對しては傑出した偉大な思想家の居らなかつたことや、従つて思想か大體上極めて類似したことなどが大切な源因であることは云ふ迄もない。

四

ビエルペール (1647—1706) によつて傳へられ、ウォルテール (1694—1778) によつて再び移植された英國經驗論は彼等の手によつて既に宗教道德に對する懷疑的否定的方面への轉向を可なりの程度にあらはして居た。進んでデイデロー (1713—1784)、ダランベール (1717—1783) 等の「百科辭典家」(Encyclopédistes) によつて經驗論は感覺論へ、自然論は唯物論へ、理神教は無神教へ、溫情的道德は利己的道德へと明白なる轉換を成遂げた。然しアルバート・ラングによつて「十八世紀佛國唯物論を鞭つ少年」と評せられ (Albert Lange : *Geschichte der Materialismus* Buch I, S. 134.) キンデルマンによつて「十八世紀唯物論の祖」と稱せられ (Windelband : *Gesch. d. neu. Phil.* Bd. I, S. 402) 「百科辭典家」よりも早くあらはしラ・メトリー (1709—1751) の「人間即機械論」(L'homme machine 1745)こそは正に機械觀的自然主義の形而上學的人性論的歸結を最も雄辯に語るものであらう。

彼は揚言して曰く、デカルトが其機械的自然哲學を行くべき處迄行かしめざりしは其理由他にあらず、當時の僧侶の迫害を恐れたる爲め強ても沈黙を守りしのみ。

されど之れ學に忠なるものなすべきことにはあらず。吾人は今デカルトの眞意のある處を敢て公言するものなり。吾こそは眞にデカルトの學徒なれと。更に説いて曰く、デカルトの自然哲學を徹底せしむれば、目的觀は當然退くべく、凡ての運動は之を衝突と反衝とに還元し得べし。斯くして殘る處は物質と其運動とのみ。機械的に見るとは唯物的に見るとの謂である。又デカルトは動物を自動機械とせり。之れが正しき根據の上に立てりとならば、同一の根據は人間に對しても亦妥當であらねばならぬ。人間と動物との間に性質的種別なし、單に分量上の相違あるのみ。物質を全く不動のものとして解すればこそ心身相關の難問起るなれ。物質は元來それ自身の中に生活力運動力を具有する。有機體の生命現象はこの物質のちのづからなる運動によつて充分に説明し得る。感覺感情を初めとして思惟執意に至る迄種々の働を現する精神なるものは單に斯る物質の微細分子の運動に外ならない。要するに精神は腦の分泌に過ぎないのであると。彼は進んで如上の所説より必然出で來る無神論、感覺的快樂說、良心の呵責をさへも夫が快樂を滅殺するの故を以つて手強く排斥したを大膽又痛快に論證した。

五

唯物論の認識論的根據は感覺論である。ラ・メトリーに次でコンディヤック(1713—1780)の感覺論の稱導されたのは、ヘーゲルの哲學史の圖式には吻合しなかつたけれど、發生的には極めて自然の順序であつたと云つてよからう。(ヘーゲルはロツクの感覺論がコンディヤックによつて佛國に移植され、其結果ラ・メトリーの唯物論生ると説いた)。私は茲に本論文の主題とせる人の思想に對して極めて親密なる關係に立てるコンディヤック殊には、其「感覺論」(Traité des sensations 1754)に就いて少しく詳細に語る義務ありと感ずる。

初めロツクの忠實なる學徒として單に師説を紹介叙説するに止まりし彼は、「感覺論」に於て初めて一家の見を發表し、近世哲學者中最も顯著なる感覺論者として世に立つた。ロツクは認識の生源として外的感覺の外に内的反省を認め、謂ふ迄なく之は極めて不徹底なる説である。彼は尙ほデカルトの物心二元論に捉はれて充分に分析を盡くして居ない。ロツクの反省作用なるものは如何にして可能であるか、夫は外界よりの刺戟によつて生起する外的感覺を素材とするによつてのみ。然らば

反省内容の生源は外的感覺の外にはあり得ない。實に認識の唯一生源の感覺なること證明を要せざる直接自明の事實である。之れ以上分析を許さざる最根本の事實である。「感覺論」には感覺が第一事實なることを定言的に言表せるのみに如何なる手續によつて之に達するか餘り説かれて無い。此點は後の著作に至つて比較的詳細に論述されて居る。さて感覺は本質上決して變化しないものである。赤の感覺は飽迄赤であつて青ともならなければ白ともならぬ。哲學者は斯る單純不變の感覺が如何の變容 (modification) 如何なる結合の過程によつて現實に見る如く複雑微妙なる精神現象を顯現するに至るかを明示すべきのみ。勿論其變容結合の順序は自然の順序を再現するものであらねばならぬ。之を分明にせんか、正しき推理の技術に無限の貢獻をなし得るであらう。(意識縁起の心理學的説明は同時に論理的思惟の規範をも與え得ると思つたのである)。彼の出發點は極めて單純であるかの如くに思はれる。彼は單純不變の感覺から種々なる精神作用現象乃至外界認識の縁起する次第を最も明晰判明ならしむる目的にて、*ディデロー*、*ラメトリー*によつて既に示唆されたる夫の有名なる「生ける石像」の比譬を用ゐた。内部は吾等の如く組織され而も凡ての觀念を排除せる精神 (*esprit*) によつて活かされたる (*animé*) 一の像を

想像せよ。而して其の像の外部は全然大理石にてつくられ如何なる感官も彼自身には使用し得ず、吾等はそれぞれに相應せる印象を受入るを得せしむる様に此等の諸感官に就て撰擇し開放を行ふの自由を保留すと想像せよ。(Théorie des sens actions p. 23)次に鼻耳舌眼皮皮膚順序にて漸次に感官を開放して夫れに相應する外界印象を受け入れしめよ。是等の種々異なる感覚が繼時的に移入されたる結果、白紙の如且つ純受動的なる精神中に如何なる變化の生ずるかを観察せよ。然らば吾人が神秘的なる能力の發動なる如く妄信する注意判断推理を初めとし、欲望意志自我等に至る迄極めて自然に且つ明白に縁起し來るを見ることが出来るであらう。之が「感覺論」の大體のプランである。

先づ石像の鼻を開いて薔薇の香を嗅がしめたとする。(最初に嗅覺を撰んだのは、香の感覺が凡ての種類の感覺中、吾等の認識の構成にあづかること最も少きもの如く思はれて居るからである。若し之れだけの單一感覺によつても尙よく多くの複雑なる心意作用を石像に起さしめることが出来れば、感覺論の妥當を立證する上に有力なる事實的根據となるであらう。石像の意識は全く薔薇の香を以つて占領せられ餘念無いであらう。斯く意識が或一つの感覺到依つて獨占されたる状態が

即ち人の注意作用と稱するものの根本形式である。而して此香の感覺は必然に快又は苦の情を生ずる。否實を云へば感覺は同時に而して常に快苦の情である。一度快苦の情あらはるるや夫は爾後の凡ての心意作用を規定し之をして漸次複雑高等なる意識へと變容せしむる支配原理となる。次に香の感覺が長びく印象を注意作用に與ふれば記憶となる。夫は同時に感情の一變容に過ぎないとは云ふ迄もない。記憶から比較が生ずる。即ち薔薇の香の記憶を保留する石像に和蘭撫子の香を嗅がしめよ。此二つの香に同時に注意を拂ふことが即ち比較作用なのである。既に比較あれば判断生ずる。比較と判断とが習慣的となり心に蓄へられて系列をなす時茲に觀念聯合の法則自然に生ずる。然らば情意的方面の緣起は如何にと云ふに之れも極めて簡單である。過去及現在の二種の香の經驗を、その快を興ふる性質と云ふ點に於て比較判断する時、欲望が生ずる。欲望は現存のものより一層よき者てふ觀念を豫想する。故に二つの繼時的狀態たとへば薔薇と和蘭撫子の香の相違を判断せる後でなければ發生しない譯である。意志は如何。或欲望を満足せりとの記憶は他の欲望も満足し得との希望を生ぜしめる。此希望が強く感ぜらるるに比例して確信が増して來る。斯様にして意志作用が生ずるのである。意志とは

欲望の非常に強くなつたもので而も欲望の對象が吾力によつて得ることが出来るとの感を伴ふものの謂に外ならない。夫れでは「我」なる感じは如何にして生ずるであらうか。最初の薔薇の香の感覺だけの時には勿論「我」も無ければ「人格」も無い。然るに感覺の種々變化するにも係らず不變なるものがある。之れが己れは以前に存在したるものと同一であると判断する。此時「我」は生ずるのである。此「我」は意志は勿論欲望にも先行する。我欲すと云ひ得る爲めには既に「我」が成立して居なければならぬから。然し乍ら「我が非我」と對立の形をとつて明確に意識せられる爲めには凡ての感覺中最も根本的な大切なる感覺（而して同時に感情でもあるが）即ち觸覺の働きを要する。（觸覺と自我觀念との關係は第二篇第一章に説いてある）。以上は感覺論第一篇第一章より第三章に至る迄の間に説かれてある處である。残る重なる章の名をあげて彼の議論の道筋を示さう。曰く、嗅官のみに限られたる人の觀念につきて「第四章」曰く、「聽官のみに限られたる人につきて」第八章、曰く、「嗅覺及聽覺の結合につきて」第九章、曰く、「味覺のみにつきて及び嗅覺聽覺に結付ける味覺につきて」第十章、曰く、「視官のみに限られし人につきて」第十一章、曰く、「嗅覺聽覺味覺と協力する視覺につきて」第十二章。此章目を一瞥したただけにても彼の言はんと欲する處を

略々想見するに難くないと思ふ。第二篇に於て、殘る一つの感官即ち觸官のみを解放して石像が外界實在(非我)の認識を得る過程を詳論し、延長距離及形狀を觸覺から派生し來つた。第三篇にては觸官と他の諸感官との協力よりして諸種の觀念概念の發生し來ることを示し、最後の第四篇に於て、凡ての感官を働かせるが未だ社會生活を營まず全く孤獨なる生を送る人を假想して其人に起る諸種の欲望感情觀念動作の緣起を細説した。最後に結論して曰く「自然のまゝなる物は凡て其生源を感覺に有す」。(Traité p. 306f) 又曰ふ「人とは彼が收得せるものの謂に外ならず」と。(p. 309) 約めて言へばコンディヤックは一切の認識を變容されたる感覺なりと説明し、凡ての認識の形式を内容の所産と解釋したのである。其論を行る簡潔明快、其論を立する精細緻密、心海の起伏を俗ら圓や三角形を取扱ふが如くに處理するあたりは、デカルトの理想とせし普汎數學を心理學上に實現せしものと見ることが出来るであらう。

吾意識を如實に觀ずれば複雑多様にして須臾も同一状態に止ることが無い。コンディヤックの云ふ如き不變單純なる感覺は何處にも認められない。薔薇の感覺も吾に對しては活きて物言ふ感覺である、動いて他を生む感覺である。念々相續して流動暫らくも已まざる薔薇の感覺を、彼の云ふ如き還元すべからざる固定の本源的事

實として抽出し來ることは如何にして可能であるか。茲に方法論の必要が生じて來る。彼は之を分析法によつて得たと云ふ。然し「感覺論」や「論理學」(Logique 1780)には單に獨斷的にしか立言するに止つて充分の論議が無い。遺稿として出版された「計算の言葉」(Langue des Calculs 1798)に於て初めて彼の方法論の詳細を窺ふことが出来る。

吾人の思惟や推論には幾多の誤謬が含まれ居る。これ皆不自然に能力を使用するが爲めである。事物の真相に徹し眞理に達せん爲には「自然に還らねばならぬ」。(ルソーの言葉と同じい處が面白い)。自然に還るとは何の意であるか。吾人が教育習慣傳説等によつて習得せるものを拂ひ捨て觀念の源に溯り、其處に疑ふ可らず還元す可らざる第一事實を發見することである。(ペーコンの偶像を捨てよと説けると意は同じ)。此第一事實の自然に發展するがまゝの順序を追従し、之を其儘の順序に再現する時眞理を得たと云ふ。斯る意味の自然に還る方法が即ち分析法、自然的方法である。約言すれば分析法とは凡ての觀念を其生源に溯りて究め、其自然の發展を研究するものに外ならない。觀念の生源とは謂ふ迄もなく單一感覺のことである。感覺は常に發生的意味に於ての第一事實なるのみならず、同時に價值上

の第一事實である。デカルトの「我思ふ」と同じく眞理の標準でもあるのである。彼の分析法は綜合法をも兼ねたものであるが、然しロックを初め凡ての經驗論者の常に用ゐて居た心理發生的研究法と少しも異なる處はない。彼の新に加へた點は寧ろ此分析法を數學的等式に顯はし唯名論的標號説を煩瑣に綿密に發展させた點にある。然し其邊は今の吾々には用は無い。(コンディヤック自身は綜合法てふ語を特別の意味に用ゐた。普遍より特殊を演繹し來らんとする純理論者の方法を綜合法とよび、彼の如く特殊より普遍への推移を再現する分析法と對立せしめた)。

彼は其研究を實證論的認識論に限り、形而上學的には不可知論をとつた。即ち外界實在と意識統一の支持者としての精神とを不可知なれども其實在することだけは許した。此點に於て依然としてロックの立場を守り唯物論には墮しなかつた。宗教道德に對しても極めて穩健の見解をとり天啓の可能をさへも許した。然し斯くの如きことは彼の認識論より來る自然の歸結ではない。彼の思想を繼承せる「觀念論者」の一支派に唯物論に走れるものを多く出したのは當然の事である。

コンディヤックの「感覺論」に次で、佛國啓蒙思潮の總括を示し唯物論の聖書と迄崇められたる「自然體系」(Système de la Nature 1770) が出版されたけれども、何等創見の見るべ

きものも無いのであるから茲に絮説する必要もあるまい。

ラ・メトリーの唯物論、コンディヤックの感覺論この二つの中に佛蘭西啓蒙思想の理論的歸結は最も鮮やかに無遠慮に表現されて居る。夫れより結果する實踐的態度の如何なるものなるべきか、今之を改めて述べる必要もあるまい。元より唯物論者必ずしも利己主義ではない、利己主義者必ずしも品性下劣ではない。然し之は學説を裏切り、理知以上に働く、或者の爲めに然るのであつて、其理論其立場より必然に將來するものは利己的、感覺的快樂主義であらねばならない。吾人は此時代程哲學の尊重せられ、哲學者の威力を揮ふた時代は尠いと云つた。さはれ其尊重其威力は餘りに高價なる犠牲を拂つて贏ち得られたるものであつた。吾意識の自發性、人格の自由、情意の要求を惜氣もなく抛つて購ひ得たる威力であつた。我を機械化し自然化し物質化し盡くしての尊重であつた。斯る我に尊敬の念起り威力備はるとは、世に不可思議の事である。自我の尊嚴は何處に残つて居よう。人の力なるものが何處に發見されよう。併も人はバスカルの言つた如く、嵐に摧かれて死にゆく今はにも尙我死すとの自覺を有する蘆である、理知の知らぬ道理を持てる心胸を備へて居る。

果然啓蒙思潮は先づ心胸に生命を托する詩人によつて正面より猛然たる反撃を加へられ、次で反省を生命とする哲學者によつて徐々なれども而も確實に、其依つて立てる地盤を根柢より覆された。其中の一人にクザンによつて「マルブランシ以來の佛國の大哲學者」と讃せられ、トルーマンによつて「ロック、コンディヤックの亞流に過ぎず」と誹しられ、テイヌによつて「著者自身は理解するが讀者は理解せぬ」と嘲けられ、キンデルバントによつて「秀れた潜思の人」と評せられ、今尙學說の充分世に知られず毀譽相夾する「孤獨の哲人」メーヌ・ドゥ・ピランが居つた。

Cousin : *History of Modern Philosophy* (trans. by Wright) Vol. I. p. 222.

Truman : *Maine de Biran's Philosophy of Will*. p. IV.

Taine : *Les philosophes classiques du XIXe Siècle*. 7ed. p. 57.

Winkelband : *Lehrbuch d. Gesch. d. Philos.* 5 A. S. 532.